

報告書

Beijing Olympic2008

審判員 湯浅よしの

今回北京で私を出迎えてくれたのは青色のユニフォームで統一された凄い数のボランティアだった。2月に行われたワールドカップの時と本当に同じ場所なのかと思うくらい整備され、緑が増えている。

開会式当日に着いたこともあり、スタジアムに近づくにつれて警察官の多さとセキュリティの厳重さにも圧巻させられた。

素晴らしい開会式の翌日行われたミーティングで下記の通りジャッジパネルが配られた。

20カ国のフェデレーションから18審判と2デッキオフィシャル。

アフリカ(1名)アメリカ(5名)アジア(2名)ヨーロッパ(8名)、オセアニア(2名)の審判

アメリカ(1名) ヨーロッパ(1名)のデッキオフィシャル。

準決勝と決勝はニュートラルジャッジで行われ、予選は各審判3回ずつダブルパネルで行われる。

シンクロは決勝のみ8組で行われるため自国の参加しているアメリカ、中国、イギリス、ドイツ、オーストラリアの審判は入らず、ニュージーランド、南アフリカと日本が全て審判に入った。

試合後のミーティングではビデオを見ながら行うこと、また予選、準決勝は演技後に場内に得点を読み上げない代わりに各審判の手元のパネルに自分以外の得点が表示されることが、前回2月のワールドカップで約束されていたが残念ながら不可能とのことであった。

4年に1度の世界の祭典オリンピックでこのようなことはあり得ないとTDC、オフィシャルは不満の様子であった。

シンクロ競技は競泳の予選、決勝の合間に1日1種目ずつ行われた。

シンクロ競技後のミーティングにて次のようなことが話し合われた。

2日目男子シンクロ高飛込ではロシアの選手が307Cで失敗したもののシンクロ採点にはほとんど影響なかった為失敗しなかった国の得点を上回り、本当に正しい国が3位になったのだろうか議論された。

またエクスキュージョン採点の1, 2が同じ演技に対し2点差が3回、1.5点差が4回あった事も問題になった。このレベルの大会ではシンクロ採点のほうが審判しやすく点の開きが少ない。例えばエクスキュージョンが「5」「8」と「9」「9.5」の場合、「5」が正しい採点であっても「8」と「9」が点数として残ってしまい「5」が消えてしまう。長い間シンクロの採点方法について話し合いが行われ、どれだけエクスキュージョンが大切かを実感させられた。

2007年から審判に対する評価制度ができた。

他の審判点数との差異、オブザーバー点数との差異がすぐにデーターに出る。

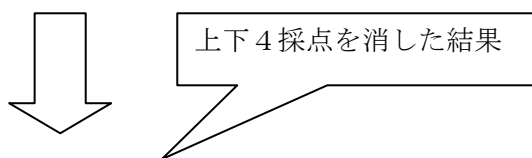
全ては飛込競技の発展と審判技術の向上のために、最高のレベルの審判員をその席に座らせるためでもある。

このデーターを元に話し合うはずだったがビデオがなく、自分以外の審判の点数も全く見られな
いため、全てを思い出すのも困難であったが問題とあればたとえ1点差であっても討論しあ
った。

毎試合後にデーターを見ながら1.5以上パネルで離れた演技について討論が行われた。

【例1】女子高飛び込み予選

点数差異	パネルA		パネルB	
	回数	%	回数	%
0	1	1%	1	1%
0.5	20	23%	8	14%
1	45	52%	29	50%
1.5	19	22%	15	26%
2	2	2%	5	9%



差異	パネルA	パネルB
0	53	30
0.5	32	25
1	2	3

* 結果としてほとんどの差異が0.5に収まるようにはなるが分析表の1.5以上の開きに関しては問題である。

審判を非難するためでなく、お互いに何処に重点をおいて見ていたか話し合いも持つことで上
下の開きを少なく、皆が同じ視線、観点で審判できるようになるためである。

審判をする心構えについて、3回4回目のオリンピック参加であっても最初の時と同様に緊張す
るとベテラン審判は語った。

【心構え】

- * 集中する。
- * 自信を持つ。
- * 点数をカテゴリー分けする。
- * 楽しむ。
- * 見たことだけをジャッジする。(見たら加点、減点する)
- * 失敗を恐れない。

* 偏見は絶対になし。

(この人は有名でうまい、とかこの種目は前に失敗をビデオでみたことがある、etc...)

* エントリーばかり見ないで高さにもボーナスを出す。

* 同じナンバーの飛びこみには比べながら採点する。

などが上げられた。

シンクロ競技は中国の念願通り全ての種目で金を獲得した。

15日から個人種目に入り準決勝は午前中、予選と決勝は7時から8時半スタートの夜の試合になった。

オリンピック競技の中でも一番にチケットが完売するくらい中国では人気の高いスポーツである。試合の何時間も前からプールの外は開門を待つ人で溢れていた。

観客席は毎日熱気に包まれた観客で埋め尽くされ、歓声の凄さには審判が顔を見合わせて苦笑いするほどであった。

3日間にわたり行われた女子飛板飛込ではスーパースターの GUO Jingjing が全演技1度も順位を譲ることなく優勝を果たした。

決勝でのキレは今ひとつだったが、高さで美しい蝦型でほぼ9点平均、415.35で圧勝した。

中国が失敗して低い点数が出ると大ブーイングが起き、見ている気分の良いものではなかった。中国としては全ての種目で金と銀を取るつもりであったが他の国も中国優勢の応援の中で素晴らしい演技で譲らない。

18日の男子飛板飛込には今回4度目の出場となる寺内健選手が悲願のメダルをかけて挑んだ。

予選では課題の307Cは避けたものの得意の305Bと5353Bが7点台、6点台平均に終わり10位で通過した。

19日の準決勝では305Bで7.5平均を出したものの他の演技では高得点を獲得し、前日の予選であれば4位に相当する478.25であったが、ほかの選手のレベルの高さと、自分の種目の難易率の低さが影響して7位で決勝に進むことになった。

5位のドイツ(481.90)から11位のオーストラリア(460.35)までは接戦だった。下記の通り100点を越える演技も何本もあり、もはや難易率3.0前後では9点平均を取らないと上位に喰い込むのは難しくなってきた。

1位： He Chong 中国 5156B (難易率 3.8) 9点平均 102.60点

4位： Castillo Yahel メキシコ 5355B (難易率 3.9) 8.8点平均 103.35点

午後8時半から行われた決勝で4本目に寺内は307Cに挑んだが、ショートになり、49点しか取れずこの段階でメダルへの夢は消えた。

次の得意とする107Bでも過去見たこともない入水ミスがあり、結果は442.50の11位に終わってしまった。

本人より緊張して見ていた私であるが、彼の「守り」ではなく「攻める」気持ちは痛いほど伝わってきた。残念な結果ではあるが大きな拍手を送りたい。

20日、21歳中川真衣選手の女子高飛込予選は無難に大失敗も成功もなく9位で通過。21日の準決勝、決勝でも彼女らしいキレが見られず2種目失敗してしまい、結果は11位に終わってしまった。

彼女は力強さで定評があり、オリンピック初舞台での夢は叶わなかったが、これから世界と勝負していく力は充分ある。失敗はしたが、今大会で彼女の思い切った「踏み切り」と「見せ場」はアピールできたと思っている。

最後の種目となった23日男子高飛込の決勝。誰も何も語らないが試合前から会場の雰囲気違った。一番白熱する大会の華である。この種目では、出場者の誰かがメダルを獲ってもおかしくない。

初日に比べて中国観客の自国のみに対する異常な声援もヤジも指導されてか少なくなっていて、他の国の応援団も競うように声援していた。誰が成功しても耳が痛くなるほどの声援であった。

ロシアは美しく、メキシコ、キューバはダイナミックに、イギリスの若きホープは将来の輝きが見える中、メダル競争で本命ではなかったオーストラリアの選手が失敗なく順位を上げていく。

3m飛板では、準決勝で敗退していた Matthew Mitcham 選手である。

最終種目では2位から4位までが接戦のため、皆が息をひそめる中30点差でトップを走っていた Zhou Luxin 選手が307Cでショートに反り込みの入水。大歓声の中 Mitcham 選手は最後の種目5255Bで10点を4枚出す演技を決め、見事に逆転優勝を飾った。

中国は8種目全制覇を目指していたがアテネ同様1種目のみ逃した。しかし、世界中がこの結果には感動して納得していることだろう。

14日間にわたって行われたオリンピック飛込競技では正確な演技、素晴らしい脚力、ダイナミックな演技、新しいテクニックを実際にこの目で見ることができ感動の一言に尽きる。

今回の五輪テーマ「ひとつの世界、ひとつの夢」が最終日には素晴らしく聞こえた。

世界中にたくさんの知人を持てたことも、ボランティア、スタッフの心のこもったもてなしも、私の人生の宝物となった。

このような素晴らしい機会を与えて頂いたことに心から感謝を申し上げ、報告とさせていただきます。